

沖縄県におけるミョウガの優位性および今後の課題

棚原尚哉

(県農研センター宮古島支所)

はじめに

沖縄県の本格的なミョウガ栽培は、1980年の県外出荷開始以降である。当時は露地栽培により、5～8月にかけて収穫が行われ、本土産が出回る8～10月以前に出荷が可能なことから、「早出し露地ミョウガ」として市場の評価も高く、平均単価は3000円/kg前後で推移した。その後、面積、生産量ともに大幅な増加を示し、1987年には生産量113t、出荷額2.7億円に達したが、1988年以降は根茎腐敗病の多発により急減し、1996年以降には殆ど栽培されなくなった(図1)。

沖縄県の優位性

ミョウガの出荷体系は、7～10月出荷の露地ミョウガおよび周年出荷のハウスミョウガに大別される。露地ミョウガは高冷地の群馬、秋田県を中心に産地が競合しているが、ハウスミョウガの97%は高知県が独占している(図2)。平均単価は、露地物が768円/kgに対し、ハウスミョウガは2015円/kgと約3倍も高く、年間を通して1500円以上の高値で取引されている(図3)。

ミョウガは短日、低温、乾燥条件下で休眠導入を行うため、施設促成栽培では電照栽培が前提となる。また、図4の示す通り、高知県では11月～翌年3月にかけてミョウガの生育が阻害される15以下の平均気温である。そのため、ハウス加温(18設定)が必要であり、経営に占める燃料費の割合が高い。しかし本県では、平均気温で15を下回ることはないため、年間を通して、無加温栽培が可能である。また、輸送面から軽量・高単価であり、ハウスミョウガは高知県が独占しているため、他産地の参入は市場からの要望も高い。

そのため、低コストで簡易な栽培技術を確立し、安定供給できれば沖縄県において有望な県外出荷品目であると言える。(ヤシガラを利用した低コスト・ミョウガ栽培法(図5)は、平成16年度沖縄農業研究会で報告)

今後の課題

今後、作型の開発により、周年出荷体系は確立していくと思われるが、現在におけるミョウガの栽培体系を図6に示す。10月下旬に定植、3月から9月上旬まで収穫し、同時に7月から8月にかけて次年度の種苗育成、更に休眠打破(2～5で60日以上)することが一般的な体系である。そのため、良質な種苗を得るためには約1年を要する、収穫最盛期に打ち切りとなる、台風被害により良質な種苗を得られない、冷蔵処理期間の管理体制など多くの問題があり、種苗供給体制の確立は急務である。

また、生産現場(特にジャーガル地域)では、栄養成長から生殖成長への転換がうまく行えず、栄養芽になるケースが多く見られる。そのため、養水管理や栽植密度、仕立法などの検討が必要であり、十分な生殖成長への転換を図ることが重要である。

その他、ヤシガラを利用した同栽培法では、ヤシガラの粉碎、吸水、載置をすべて手作業で行うため、ヤシガラ培地の圧縮成型化により、畦上に成型培地を載置、吸水させることでより簡易な栽培システムになると考える。

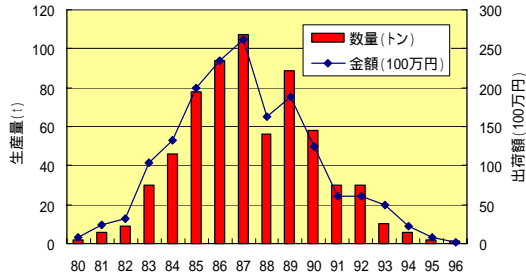


図1. 沖縄県におけるミョウガの販売実績

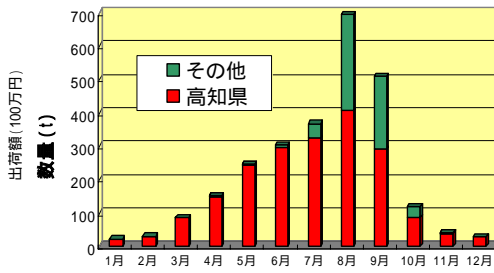


図2. ミョウガの月別出荷量
(東京都中央卸売市場・2004年度)

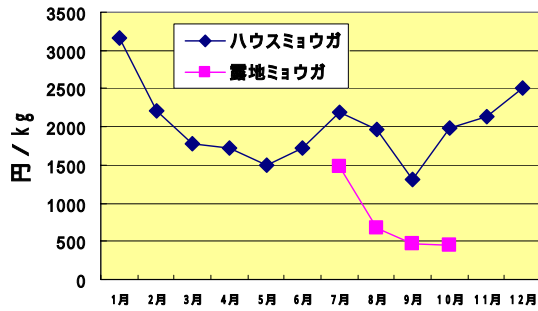


図3. ミョウガの月別平均単価
(東京都中央卸売市場・2004年度)

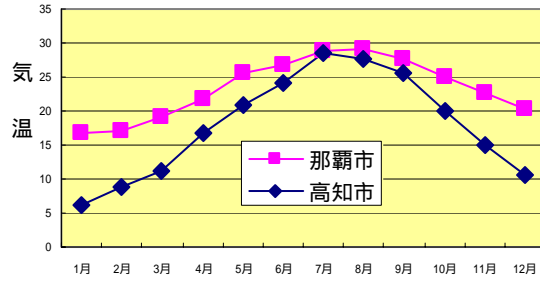


図4. 那覇市および高知市における
平均気温の推移(2004年)



図5. ヤシガラを利用したミョウガの栽培法.

7月			8月			9月			10月			11月			12月		
上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
収 穫																	
消灯・水切り			掘取り														
						冷蔵保存											
												催芽・定植準備・定植			生育期間		
1月			2月			3月			4月			5月			6月		
上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
生育期間			マルチ被覆			収 穫											

図6. ミョウガの栽培体系(現在)